

## 平成21年度購入文化財一覧

### 【京都国立博物館】（計7件）

- 1 ○種 別 <絵画>  
○名 称 「新曲」絵巻 「しんきょく」えまき  
○員 数 二巻  
○時 代 江戸時代 18世紀  
○品 質 紙本著色  
○寸 法 等 各縦 33.2cm 長(上)1722.2cm (下)1463.8cm  
○作品概要 この作品は幸若舞の「新曲」を絵巻化したもので、「新曲」という名は、幸若舞曲に最後に追加された新しい曲であることによるという。  
物語は『太平記』巻第十八の「一宮御息所事」に取材したもので、後醍醐天皇の第一皇子尊良親王の恋を主題としている。  
『新曲』の奈良絵本は、明星大学所蔵縦型特大本2冊、工藤早弓著『奈良絵本上』（京都書院）所収横型本2冊、『日本書古書目録89』（臨川書店）所載横型3冊本、京都・個人蔵改装絵巻本2巻などが知られ、絵巻はこのほか、桃山時代に遡る作品が一件知られるのみで、遺品は多くない。  
金泥下絵のある詞書料紙をもち、町絵師の画風になる絵巻は、近世大名の注文制作になることが指摘されているが、この絵巻もその可能性がある。制作時期は、人物表現や水墨画中国画の特色などから、十八世紀初め頃と推定される。  
この絵巻は各巻首に「松代藩飯島勝蔵書章」の印があり、箱に「菊園文庫」と記されており、松代藩の故実家で、幕末に藩史編纂を行った飯島勝休(1815~1888)の蔵書であったことが知られる。飯島の蔵書のうち、藩史史料は現在長野県歴史館に飯島文庫として保管されているが、文学資料は外に出たらしく、他にも同印のある本が知られている。本絵巻は近年イギリスのオークションで出品され、里帰りした。  
博物館では近年中世文学資料としての絵巻・絵本の収集に努めており、昨年度購入した「すゝか」奈良絵本改装絵巻に続き、今回「新曲」の購入ができれば、これまで孤立的であった館蔵品の羅生門絵巻や、寄託品の烏帽子折など、舞の本やお伽草紙絵巻の展示が充実すると考えられる。
- 購入金額 5,775,000円



- 2 ○種 別 <絵画>  
○名 称 双鹿図 長澤蘆雪筆 そうろくず ながさわろせつひつ  
○員 数 一幅  
○時 代 江戸時代中期 (18世紀)  
○品 質 紙本着色金泥  
○寸 法 等 79.2cm×88.7cm  
○作品概要 立ち姿の雄鹿と、脚を屈した雌鹿が描かれる。左下に「蘆雪写」の署名と「長澤」「魚」の印がある。長澤蘆雪(1754~1799・宝暦4~寛政11)は、円山応挙の門人。その作品には、自由な主題解釈、さまざまな造形表現の実験が見られ、独自の生命感あふれる表現をしめしており、個性的画家として評価はとみに高まっている。  
印は、山川武氏による印譜(国華860号)のNo.20にあたる。森川家旧蔵「蓬萊山図」などの印影と一致する。草書落款であり、南紀での仕事のあと、とくに寛政4年(1792)以降、最晩年作と目される。



当館蔵の円山応挙筆「鹿図」2曲1隻の図様をちょうど180度回転させたような図様で、応挙の雄鹿が正面観でこちらを見つめるのに対し、こちらにお尻を向けた後姿に描かれている。応挙の鹿の顔が可憐な表情をしめすのに対して、この蘆雪の鹿の顔はどこか人間臭い。

対象は、細部までじつに丁寧に描かれており、芦雪の力量がよく窺える。館蔵の応挙の鹿図は、18世紀半ば以降、大流行した南蘋流の鹿の描き方と関連付けられるが、蘆雪の鹿図は、その延長線上にあって、さらに蘆雪らしい変化を加えたものと位置づけられよう。

蘆雪が描いた動物図としては南紀・無量寺の虎図襖が有名で、その人間くさいユニークさが注目されているが、本作にも蘆雪らしい魅力が遺憾なくしめされている。

当館には、京都の絵師でありながら蘆雪の作品がまだ一点も館蔵されていない。本作は、なかなかの大幅であり、展示効果も高い。「近世絵画における動物表現」といった親しみのあるテーマでの特集展示を行う際にも、活躍が期待される。収集が強く望まれる。

○購入金額 10,500,000円

- 3 ○種別  
○名称  
○員数  
○時代  
○品質  
○寸法  
○作品概要

<絵画>

秘伝画法書 狩野永良筆

ひでんがほうしょ かのうえいりょうひつ

二冊

宝暦十三年（1763）

紙本墨書・墨画

各縦18.1cm、横12.2cm

京狩野家の画法の秘伝書で2帖からなり、表裏にわたって文章・図解がみられる。

「上帖」では、序文のあと、牧谿・玉澗・高然暉・夏珪をはじめ中国の画家15名の画法を文章で記したあと、岩・滝・水流の描き方、樹木の描き方、飛ぶ鳥の描き方、樹木の木肌の描き分け、人物の描き方（とくに裸体を描いて、その上に着物をきせて描く方法は、円山応挙の手法の先駆けとなるもの）などを図解する。「下帖」では、人物の描き方、山水図の描き方、楼閣の描き方などが図解されている。

序文末に「時二宝暦十三癸未年孟夏下旬／狩野縫殿助藤原永良謹白」とあり、白文方印「狩埜」朱文方印「永良」が捺されている。これにより、宝暦十三年（1763）4月下旬、狩野永良（1741～1771）23歳のときの自筆本と分かる。

狩野永良は、山楽・山雪に始まる京狩野の第六代。31歳没と若くして没している。公家の九条家や宮廷で活動した。若くして亡くなったため、作品の絶対量も限られると思われる。作例としては、「白梅群鶏図」（京都国立博物館、平成20年度購入）、「親子犬図」「西王母・東方朔図屏風」（いずれも静岡県立美術館）など、数件が知られるにすぎない。遺された作品には、同時代の長崎派や伊藤若冲、池大雅などの影響がしめされている。

土居次義『画伝集』の人物画法」（『近世日本絵画の研究』美術出版社 1970 所収）に、土居氏所有の狩野永良の秘伝画法書が紹介されているが、それとは別のもの。

京狩野については、初期の山楽・山雪・永納・永敬、幕末の永岳に関しては、かなり研究されてきたが、その間の絵師に関しては、これまでほとんど研究が進んでいない。今後、研



究されるべき絵師たちであり、なかでも京都文化の隆盛期である18世紀半ばに活動した永良は注目される。その永良がのこした、京狩野の絵画制作法のいったんをしめす、きわめて興味深い資料であり、館蔵にふさわしいものとして、収集が望まれる。京狩野作品をあつめた展示にも生かされることになろう。

○購入金額 2,100,000円

- 4 ○種別 <陶磁>  
 ○名称 色絵西洋人物図急須 尾形周平作  
 いろえせいようじんぶつずきゆうす おがたしゆうへいさく一口  
 ○員数 一口  
 ○時代 江戸時代(19世紀)  
 ○品質 施釉陶器、底裏周辺露胎  
 ○寸法 総高9.9cm 口径6.4cm 胴径9.3cm 底径6.9cm  
 長12.0cm 幅10.7cm

○作品概要 江戸時代後期の京焼の名工として知られる二代高橋道八(仁阿弥:1783~1855)の実弟・初代尾形周平(1788~1839)の製作にかかる煎茶具の急須。周平は、尾形乾山(1663~1743)に私淑し、尾形姓を名乗った。共箱であることに加え、胴部に「應需造之 甲午秋良日 尾形周平」という赤絵銘があることから、天保五年(1834)に製作されたものであることが判り、貴重である。

胴部に描かれた西洋人図ひとつをとっても、「阿蘭陀趣味」といわれる江戸時代後期の西洋趣味は十分に窺われるところであるが、クリーム色の器に褐色の彩色を施している点も、クリームウェアと呼ばれるイギリス製の皿の意識的な模倣と考えられ、全体に「阿蘭陀趣味」溢れる作品となっている。小品ではあるが、作者・制作年代が判るという点で研究上の基準作となることに加え、煎茶に「阿蘭陀趣味」という江戸時代後期の文化的流行を端的に示す作品である。

○購入金額 2,100,000円

- 5 ○種別 <漆工>  
 ○名称 双龍花鳥蒔絵螺鈿裁縫道具入  
 そうりゆうかちょうまきえらでんさいほうどうぐいれ一合  
 ○員数 一合  
 ○時代 江戸時代 1640年前後  
 ○品質 木製漆塗蒔絵螺鈿  
 ○寸法 16.5×4.3×3.5cm

○作品概要 西洋人の求めに応じて制作された漆器。16世紀末以来、大量に輸出された洋櫃や書筆筒などの定番商品とは異なり、細かな注文に応じて作られた道具入れである。印籠蓋造で、蓋と身の側面にそれぞれ一対の紐通しがあり、まさに印籠のように脇に通した紐で蓋を閉じて携帯できるようになっている。鋏の鞘と棒状の器具を入れる孔があり、オランダに伝わる銀製や革製の類品から、女性用の携帯裁縫道具入れと考えられる(付属の金象嵌の鋏は18世紀の品と思われる)。16世紀の終わりから17世紀の間、オランダの女性は腰からスカートにそって長い鎖を垂らし、鍵や裁縫道具入れをぶら下げていた。例えばヘンドリック・アフェルカンプ(1585-1634)の描いた風俗画に裁縫道具入れをぶら下げた女性たちの後姿を確認することができる。



日本製の輸出漆器の様式は、もとは黒漆地に金平蒔絵と螺鈿を用いて、幾何学文の縁取りの中に余白を残さずに花鳥獸などを描くいわゆる「南蛮漆器」が主流であった。しかし、1630年代から徐々に、螺鈿を用いず高蒔絵を交えて余白のある図を描く「紅毛漆器」へ変化すると考えられている。また1640年前後には、非常に丁寧な蒔絵の特注品が作られたことが知られている。本品は、螺鈿と平蒔絵を用いた幾何学文に南蛮漆器の名残を残しつつ、余白を多く残した龍、松に鳳凰、竹に虎などの図に新しさを見せており、特殊な形状や丁寧な細工からも、1630-40年の過渡期の特注品と位置づけられる。小品ながら、世界にひとつしか確認されていない珍品中の珍品であり、保存状態も抜群によく、江戸時代に西洋の需要にさえ応えてものづくりをおこなっていた京都の柔軟な技術力を伝える点でも貴重であるため、京都の国立博物館の収蔵品として一般に公開されるに相応しい品といえるだろう。

○購入金額 12,000,000円

- 6 ○種別 <考古>  
 ○名称 三角縁三神三獸鏡 さんかくぶちさんしんさんじゅうきょう  
 ○員数 一面  
 ○時代 古墳時代 4世紀  
 ○品質 青銅鑄造  
 ○寸法 面径 21.2cm  
 ○作品概要 古墳時代前期に日本で製作された青銅鏡。いわゆる倣製鏡。鏡背面の内区に六個の乳を配し、その間に形骸化した神像と獸像をそれぞれ三体配置する。銘帯には「吾作明鏡甚独孫子宜~」の文字が鑄出されている。この文字は日本列島に於ける漢字表現の最古例のひとつ。同じ形の鏡が北部九州や大阪府からも発見されているが、これは新資料といえる。出土地は不詳。

○購入金額 6,000,000円



- 7 ○種別 <考古>  
 ○名称 画文帯神獸鏡 がもんたいしんじゅうきょう  
 ○員数 一面  
 ○時代 古墳時代 5世紀  
 ○品質 青銅鑄造  
 ○寸法 面径 21.2cm  
 ○作品概要 古墳時代中期、5世紀の古墳から出土する例の多い鏡。中国鏡を日本列島で精巧に模倣したもの。鏡背面の内区には神像と獸像を交互に配置している。銘文は方形の区画内にあり「天王日月」と鑄出される。銅質は良好。出土地不詳。

○購入金額 2,000,000円



以上